

江戸時代における賤民支配の一考察 身分法上の穢多の地位

著者	荒井 貢次郎
雑誌名	東洋法学
巻	1
ページ	215-240
発行年	1957-11
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00007753/

江戸時代における賤民支配の一考察

——身分法上の穢多の地位——

荒井貢次郎

はしがき

I 賤民支配体制

1 弾左衛門由緒書と頼朝公判物

2 江戸時代の良・賤民差別の法的基礎

3 賤民支配体制確立の訴訟

II 賤民支配体制確立の陣痛

1 穢多頭支配から浄瑠璃太夫・役者等の離脱

2 穢多対座頭（当道）の訴訟と座頭の離脱

むすび

江戸時代における賤民支配の一考察

は し が き

江戸時代の初期にあつては、まだ穢多、非人及びその他の賤民との間には、その区分が截然と決定される迄に至つていなかった。そこで享保七壬寅年（一七二二）に、穢多頭矢野弾左衛門対非人頭車善七の争論が、賤民支配権をめぐつて展開された。しかし、その訴訟は、弾左衛門が差出した頼朝の御判物——たとえ、それが偽証文にもせよの効力が發揮され、そこに記載の事項を一応幕府は、政策的顧慮により承認し、終に、弾左衛門は、非人等賤民を支配する権力を獲得し、穢多の身分法上の地位が確立した。

本稿では、頼朝公判物による支配権の確立並びにその被支配層のうち歌舞伎役者、座頭等の離脱の経過を考察してみたい。

I 賤民支配体制

1 弾左衛門由緒書と頼朝公判物

(一) 穢多頭弾左衛門の享保四年（一七一九）由緒書^(長史)のうちにある一条によると、

一、私先祖撰津国池田より相州鎌倉に下り相勤、長吏以下のもの強勢たりといへども、私先祖に支配被_レ為_二仰付_一候とあり、また同十年（一七二五）九月の由緒書⁽²⁾にも、同じ趣旨のことが記されている。すなわち、

一、此度私由緒御尋に付先達て差上置候古証文の写、并に由緒書一通差上候云々

また家康が、江戸入城（一六〇〇）の際、弾左衛門の支配権を確認した点につき享保四年（一七一九）三月の由緒書

(3) 2、

一、関東御入国之御時、私先祖武藏府中迄罷出、鎌倉より段々相勤候由緒申上候へば、御役并に長吏以下支配被_レ為_二仰付_二其以後小田原氏直公御証文を以、其所の長吏太郎左衛門以下長吏支配奉願候処、御取上無_レ之、其証文被_二召上_二私先祖へ被_二下置_一候。其後^(六九二)元禄五申年上州下仁田村馬左衛門と申者、長吏と穢多の論仕、甲斐信玄公御証文御評定所へ奉_二差上_二支配可_レ離と公事仕候処、私祖父申上候は、古来より穢多と申儀世話にて御座候。古来の証文等皆長吏と御書出被遊或は御当様家に於て革作弥左衛門と御書出被_二下置_一候、其御書出今所持仕候。依_レ之私申分相立、右の御証文御評定所へ被_二召上_二私へ被_二下置_一急度御仕置の上、如_二先々_一支配に被_レ為_二仰付_一候。

と記してある。

この弾左衛門由緒書といわれる文書は、その種類はかなり多い。享保四年の由緒書、同十年の書上、その他旧来の証書の写等が散見する(4)。本居内遠は、「賤者考」(5)で、

穢多頭弾左衛門惣支配をなす祖先は家系賤しからざりし者なりしが故ありてかくなれりとここに伝ふる由緒書とて頼朝卿の時の掟なるよしにてくさぐさの品種の者を支配すべき由の定書を世に写に伝ふるありその品目廿八種ありて俗に二十八ヶ条といひて賤者として忌避くといへり此由緒書といふ者果して正しき物か否を知らず他日搜索して書加ふへし鎌倉頃の物と見ては時代にうちあはずいぶかしき事もあり

と述べ、一応疑念をさしはさんでいる。その後も、諸学者によつて引続き考証が重ねられた。しかし、なにはともあれ、弾左衛門一族が、鎌倉附近に住んでいたことは、他の文書からも推測できよう。そして、三浦周行博士(6)は、

彈左衛門に従へば、其祖先は摂津池田より出て、相模鎌倉に赴き、源頼朝に仕へ、其許可を得て賤民の統領となりしと称するも、もとより信すべからず。^(一八〇) 治承四年九月頼朝の鎌倉長吏彈左衛門頼兼に宛てたる証文、即ち頼朝公御墨付なるものを伝ふるも、全く後世の偽造に係れり。

といつてゐる。

彈家手代石垣元七氏の記述した「彈家之経歴並彈左衛門直樹起業概要」(明治二十二年稿)⁽⁷⁾には、

一、彈家の鼻祖は摂津国池田より鎌倉に下り治承年中源右府公の御取立を以て長吏以下二十八職の支配を被^レ命、当時諸皮革類、刑場の御用等相勤め爾来足利家御代応永年間持氏公より関八州長吏の主頭たるべき御証文下され、世々関東に僑居し(下略)

とあり、矢野(淺草)彈左衛門は、彈左衛門内記と改名、さらに彈直樹と改めている。彈左衛門のことは、江戸町奉行所等の役所では、淺草彈左衛門といったが、諸大名、社寺、町家では矢野彈左衛門といった。

享保年間の「江戸官鑰秘鑑」⁽⁸⁾、寛政三年(一七九一)編纂の「地方凡例録」⁽⁹⁾、天保年間刊「環斎紀聞」⁽¹⁰⁾、および「市尹要覽」⁽¹¹⁾では、初代の彈左衛門は、摂津池田から鎌倉に下つたとあり、その祖先は、秦人の後裔秦左衛門武虎との説を収録している。が、他の説は、源頼朝の庶子であるという。しかしこれには信憑できる証拠は挙げていない。とにかく摂津池田から下つてきた点では諸書いずれの記事も一致している⁽¹²⁾。溝口靖夫氏は、彈左衛門の祖先が、摂津池田町外火打村またはその附近にある秦野村の出身ではないかと推定している⁽¹³⁾。

(二) 彈左衛門の祖先が、頼朝より頂戴したという御判物⁽¹⁴⁾につきここで検討しよう。

享保十年(一七二五)の由緒書附録の判物とは、

鎌倉藤原長吏彈左衛門賴兼写之

長吏 座頭 舞々 猿樂 陰陽師 壁ぬり 弦師 鋳物師 辻盲 非人 猿引 躰扣 土鍋 石切 土器師
放下師 笠繕^(繕) 渡守 山守 青屋 坪立 髮結 切付師 鉦打 獅子舞 箕作り 傀儡師 傾城屋
右之外之者数多有之といへ共是皆長吏下た類へし盜賊之輩へ長吏として可行之湯屋風呂屋傾城屋之下ニ付猶船大工
捧作り長吏之下たるへし人形作は傀儡師之下ニ付杵作革細工二十八品^(番)之下たるへし

賴朝 御判

治承四年庚子九月

鎌倉長吏 彈左衛門

とあるが、「史籍雄纂」(16)に収録の由緒書に奉書半切にて張付けてあつたという判物の写には、

一賴朝公より私先祖へ被ニ下置一候御書付之写、左之通、

一長吏、座頭、舞々、猿樂、陰陽師、壁塗、土鍋、鋳物師、辻目暗、非人、猿引、鉢扣、弦指、石切、土器師、放
下、笠縫、渡守、山守、青屋、坪立、筆結、墨師、関守、鐘打、獅子舞、みの作、傀儡師、傾城や、
右之外道之物数多附有之といへども、是皆長吏者其上たるべし、此内盜賊の輩長吏として可レ行レ之、湯屋風呂屋
は、傾城屋之下たるへし、人形舞は皆々二十八番之下たるへし、

賴朝 御判

鎌倉長吏彈左衛門賴兼

但賴兼より下は幽に相見申候

治承四年九月 日

（石井良助先生指導、荒井貢次郎作成）

[illegible]

とあり、以上二つの文書の文言を対照すると変化が示されている。これのみでなく、その他数種を挙げられる。なお、これら判物の基本形は、相州鎌倉郡極楽寺村長吏九郎左衛門所蔵の文書が、その元本に近いらしく、他はこれを書き写し、または時代の推移に伴ない、その職業の増減があつたものであらう。

九郎左衛門所蔵文書たる証狀一通⁽¹⁶⁾に、

与藤原彈左衛門長吏座頭舞々猿楽陰陽師壁塗土鍋鑄物師辻目暗非人猿引。鉢叩絃指石切。土器師放下。笠縫渡守山守青也坪立筆結墨師。関守鐘打獅子舞養衣作傀儡師傾城屋右之外道の物数多附有之候是皆長吏は其上たるべし此内盜賊之輩者長吏として可行是風呂屋湯屋は傾城屋の下たるべし人形舞々廿八□□□□悉達如件。治承四年九月。系図鎌倉住人藤原彈左衛門頼兼。頼朝華押。

とある。各種の由緒書、判物についての考証は、拙稿「彈左衛門由緒書について——所謂廿九座」⁽¹⁷⁾を御覽下されば幸いである。

なお、彈左衛門が、支配する座も、時代により、或は、判物の写の種類により変化を示している。これらを表で示せば前表の通りである。(二二〇—一頁掲出)。

- (1)(2) 筆者所蔵「彈左衛門由緒、享保年中町奉行所江差出候諸書付類写」(彈左衛門由緒書集成)
- (3) 三好伊平次氏「同和問題の歴史的研究」三三九頁
- (4) 池底叢書要目 上
- (5) 本居内遠「賤者考」(「本居内遠全集」第十二、一九三頁)
- (6) 三浦周行博士「法制史之研究」一一三三頁
- (7) 三好伊平次氏、前掲書、三二九—三三二頁

(8) 「御府内備考」巻之二十(「大日本地誌大系」第一巻四〇四—五頁) 参考

(9) 「日本経済大典」四三巻

(10) 筆者所蔵「環斎紀聞」のうち「彈左衛門由緒并頼朝より御判物の事」の章。三好伊平次氏、前掲書、三二八頁

(11)(12) 三好氏、前掲書、三三二頁

(13) 「融和問題研究」三四輯、一五九頁

(14) 筆者所蔵、前掲由緒書集成所収の一種にして、彈左衛門支配座一覽表に引用したのとは異なる。

(15) 「史籍雜纂」(国書刊行会版) 第三、二七—八頁

(16) 「新篇相模風土記」(相武史料刊行会版、巻百七、村里部、鎌倉郡二十九、山之内庄) 五九三頁

(17) 「中大評論」(中央大学刊) 一九五〇年・第一号において取扱つた由緒書は享保四年(一七一九) 由緒書、九郎左衛門古

証文、享保十年(一七二五) 由緒書、「史籍雜纂」所収由緒書、寛文七年(一六六七) 由緒書、「賤者考」所収由緒書、「類聚近世風俗志」(「守貞漫稿」) 所収由緒書二種、穢多巻物(伝大宝元年《七〇一》) である。

2 江戸時代の良・賤民差別の法的基礎

(一) 江戸時代初期、良民と賤民との間の階級的差別は、法的に嚴重に設けられていなかった。江戸浅草には、穢多頭彈左衛門がいて、「新撰憲法秘録」によると、

一、穢多頭彈左衛門支配場之事

關八州并關外は甲州郡内谷村、駿州駿東郡佐野村、御厨村、豆州之内千駄継村に罷在候ものは、彈左衛門支配致、此外在方に散居致候外下非人々別は其処之下小屋頭共相改、彈左衛門方へ差出候

とあるように、世襲的に關八州その他の地域に居住する穢多、非人等の賤民層を支配していた。従つて彈左衛門は、日本全国を覆つた支配権をもつていたわけではない。この頃のその支配外の地方では、一般的にいって穢多頭をおか

ず、通常の役所で百姓、町人等の常民と同じ人別帳に登載されていたが、時代を経るに伴ない次第に差別が明らかに現われてきた⁽¹⁾。

戸籍面だけに限らず、幕府は、服制にも常民との差別を明らかにしようとした。例えば、享保八年（一七二三）十一月に、非人の斬髪を命令し、冠り物をも禁止した⁽²⁾⁽³⁾。

こうした差別措置が執られたので、賤民は、一応まったく常民と区別されることとなつた。ここに初めて法的な差別取締りの第一歩が印された。そうして特に安政六年（一八五九）になると、時の江戸町奉行池田播磨守は、凡そ穢多の身分は、平民の七分の一に相当する⁽⁴⁾。

という旨の判決を下している。

(二) 裁判上の差別待遇は、「地方凡例録」に⁽⁵⁾、

一 穢多非人類吟味事カ、其外何品ニテモ呼出ノ節、役所ヨリ直ニハ差紙等不レ遣、其所ノ村役人召ツレ可^レ罷出^一旨申遣シ、白沙へ入ル時百姓ヲ筵ノ上ニ置ケバ、右ノ者ハ砂利ノ上ナリ、百姓砂利ノ上ナラバ、後ノ方ヘ引下ゲ差別分り候様ニ差置、其外ノ取計ヒハ替ル事ナシ、尤可^レ取書附等モ申口ノ赴相記シ、奥ニ村役人ノ印形取タル方ヨロシ、左レドモ大切ノ吟味等、エタ非人自身印形無テハ如何成、罪科等ニハ自身ノ印形ヲトルベシ、一通通タヅネ事ナド、彼者ドモ申上候赴一同罷出承知仕、相違無^レ之趣村役人奥書ニ印形トリテ済事也とある。

(三) 武蔵国児玉郡内の例⁽⁶⁾によれば、

穢多の地位は甚た低く、外出には、藁靴、三斗笠を著用し、普通の百姓と席を共にすること能はざるのみなら

す、宿内の門地あるものとの応対に土下座せり

以上の例を見てもわかるように、常民と法的にいろいろと服装生活その他で差別をつけられていたのは、明らかである。しかしその全貌は、資料が不足のため不明である。

(1) (イ) 徳島藩は、正徳三年（一七一三）に、織多を百姓町人と別帳に記載させた。

(ロ) 江戸幕府は、徳島藩の措置と同じ頃、賤民戸籍（人別帳）上の区別に留意し、江戸、京都、大阪の織多の調査を命令している。

(ハ) 京都では、町奉行から天部、六条、北小路等の由緒書を享保二年（一七一七）に書上させている。

(ニ) 江戸では、弾左衛門にその由緒書を享保四年（一七一九）に、町奉行に提出させている。

(3) (イ) 「融和事業研究」《中央融和事業協会刊》三四輯、一五四頁）

古来は非人の分髪結際よりはさみ元結かけ候て髪結候儀無御座候処中頃預け者其外役相勤候に付いつとなく非人元結にて髪を結常の者同前に罷成候畢竟目印無御座候故徒ら者相紛れ申候依之自今は頭分并組頭の非人は只今迄の通に仕其外非人共は不殘如古来髪結際よりはさみざん切りにいたし頭中は勿論惣体かぶり物一切不為仕候様に可然奉存候御附札

伺の通可被申付候

右の通罷出候ても差支候儀無御座候依之奉畏候以上

大岡越前守
諏訪美濃守

右両通卯十一月二十二日松平左近将監殿え上る右両通十二月十日御附札の通御下知済同十八日内寄合へ弾左衛門善七松右衛門呼出し申渡す

（内務省警保局「徳川時代警察沿革誌」上巻、七四七—八頁）

(ロ) 安永七年（一七七八）十月二十三日織多非人 法外御停止御書付

江戸時代における賤民支配の一考察

(前略) 兼々穢多非人茶筌之類へ嚴敷申渡云々

(天保集成八卷)

(3) 安永七年十月の「穢多非人風俗之儀ニ付御触書」のうちに、「百姓町人躰ニ紛し候ものハ嚴敷御仕置申付候云々」とある。(教令類纂。天明集録。「徳川禁令考」第五帙《司法資料、第一八〇号》八〇六頁)

(4) 柳瀬頼介氏「社会外の社会・穢多非人」五四―五頁

(5) 大石久敬「地方凡例録」(大倉本) 卷八(「日本経済大典」第四十二、四六八頁)

(6) 諸井六郎氏「徳川時代之武蔵本庄」一五七頁

3 賤民支配体制確立の訴訟

賤民は、享保の改革により、それらの職業の官許の過程を経て、為政者の賤民支配体制確立下に束縛されていく道を辿らされていった。

ところで、賤業がいかにして官許となつたかを述べる前に、一応当時の賤民層が、どのような生活をしていたかについて一考しておきたい。江戸時代以前、賤民は、戦乱が、原因し、大量にそうした常民が、下層社会へと沈下する現象がみられた。それら貧困化した民衆は、浮浪民としてその数を増加していったが、やがて徐々に、「職人尽歎合」に現われたとおりの室町時代の賤民の共同体を形成し、江戸時代になると、そうした共同体は、浮浪者、犯罪人の好個の隠れ場所となつた。これに加えて切支丹宗門、不平分子も流れ込み、ここに支配層は、それらの賤民層から醸成される諸々の社会問題の対策と解決に迫られてきた。

こうした賤民層の問題克服には、消極政策で臨む以上に、むしろ積極的に、賤民内部の自治体制を利用するため、為政者の立場において賤民の統一に手を着けるに至つた。そうした時期が享保年間であり、幕府の体制についてみて

も、再整備期に當つていた。従つて従来は、臨機応変に、慣例によつてその都度取締つていたのを、一応訴訟のあつた機会に、その他適宜な行政措置で成文化してきた。

さて、賤民を統一する手段として幕府は、賤民に或る程度の自治権を許容し、賤民のうちでも名門にして勢力のある者に、その統卒権を与えようとした⁽¹⁾。

そこで、江戸時代の初期においては、穢多と非人との区別さえも不明確であつた。それら二つのものの身分を明らかにさせ、ここに穢多と非人の支配関係の確立に乗り出すに至つたのが、為政者の着手した賤民に対する積極政策の第一歩であつた。

享保七年（一七二二）に、穢多頭彈左衛門と非人頭車善七との間に、支配権をめぐつて論争があつた。すなわち、「賤者考」⁽²⁾に、

享保七年寅年彈左衛門と車善七と爭論あり御吟味被仰付彈左衛門方より右之目錄に頼朝公の御判有之書物差出候に付諸事彈左衛門利運になり善七は幼少故彈左衛門へ御預け云々とあり、また「史籍雜纂」⁽³⁾に、

一 彈左衛門善七、五年以前度々御裁許有^レ之候処、善七より彈左衛門支配に而無^レ之段相論、去る廿一日評定所へ被三召出^一候由、

彈左衛門、善七、一類七人^{是は善七方七人と云}、式人者、三人者

右者非人支配

一 去廿一日評定所に而被三仰渡^一候は、五年以来度々御裁許有^レ之、善七を彈左衛門支配に無^レ之段相論不届に

候、当善七十三歳、幼少何事茂不レ存候処に右七人者共相論、依レ之七人者彈左衛門へ被レ下候、彈左衛門方之仕置に可三申付一候、右七人之家財闕所に可レ仕候旨被三仰付一候処、七人之内老人無念に存、評定所之石垣に頭を打付、舌を喰切申候由、則彈左衛門方より老人に四人宛相付、評定所之牢輿に乗、町与力同心押、彈左衛門方へ被レ参候由、

一 彈左衛門方より善七方之屋敷、七人者家財闕所に差遣候処、善七屋鋪之内騒動に而、善七立退候由、右屋敷之内門を閉、内へ一人も入不レ申候由、式人者三人者は、七人者に組不レ仕候に付、御構無レ之、善七幼少に付御公儀より式人者、三人者へ善七御預ケ、善七守立候様に被三仰渡一候、

として、相論は、結局彈左衛門が、由緒書等を証拠として申立てたので勝訴した。

このようにして、穢多頭は、先ず賤民層の頭に登り、乞胸⁽⁴⁾もこれに即応して支配に服することになった。この事件を通して知られることは、為政者は、直ぐ一般常民に復帰できる非人よりも、身分法上、完全に一般常民と一線を劃して差別されてきた穢多に支配の実権を掌握させ、もつて幕藩体制の最下層における統治の完璧をねらつたものといえる。

穢多と非人との身分につき、更に附説すれば、穢多のすべてが、「先天的賤民」⁽⁵⁾といわれるのに反して、非人のうちには、既述の如く、常民ががしばしば、諸犯罪事情で、賤民籍に編入されてきている。例えば、近親(姉妹、伯叔母、姪)の私通、三笠附の句拾⁽⁶⁾、取退無尽の札売等、幕府の刑法たる公事方御定書(御定書百箇条)では、すべて非人手下に処せられている⁽⁷⁾。

また、犯罪がなくとも、無宿で引取人のない者が非人手下にされた。こうした強制的に手下に配せられる以外に、

本人の自由意志で、希望すれば、非人の配下にされる場合がある。それには、弾左衛門が、相当な手続をした場合に限り許下された⁽⁸⁾。

なお、犯罪によつて非人手下に処せられた者は、「赦」に遭えば、罪が免ぜられ、そうでなく犯罪人でない者は、その親族等から請願があれば、常民（平人）に復籍できた。これは「素人に引立つる」または「非人の足洗」ともいつた。「徳川時代警察沿革誌」⁽⁹⁾上巻によると、安永六年（一七七七）五月八日の条に、

穢多非人類素人へ引上の事

先年武州榛沢郡新戒村穢多医道功者にて村方調法に相成候間平人に引上医師にいたし度旨申之向寄の非人頭差障候に付其節の支配御代官より奉行所へ内伺いたし候処左の通

弾左衛門より差出候書付御渡有之候事

全体非人素生のもの素人には不仕候往古より作法にて御座候尤素人一旦非人に相成候ものも拾ヶ年相立不申内者其非人の縁者より引上申度段非人小屋え申来候節其趣非人頭共より私方え申出候間証文を取素人にいたし候様申付候尤拾ヶ年相立候ては素人に不仕候作法に御座候然共非人より素人に相成候儀出世に御座候間近來年永久數非人にても其非人の縁者より引上申度段非人頭共方え相願候得者一応右作法之趣申聞頻に引上申度段申之候もの者証文を取為引上候得共前書に申上候非人素生のもの素人には不仕候作法に御座候

右の趣御尋に付乍恐以書付奉申上候以上

浅草 弾左衛門

とあるから、拾年間非人であつた場合は、常民へ復籍できない。しかし親族等より特に請願があれば、例外として取

扱われることもあつた。

元祿五年（一六九二）、上州下仁田村長吏馬左衛門が、評定所へ出訴し、長吏と穢多との別を論じて彈左衛門の支配を脱離しようとしたが、彈左衛門は、「古来より穢多と申儀世話にて御座候」と答えて遂に勝訴している⁽¹⁰⁾。

(1) 荒井茂雄氏「香具師考」（同氏『「香具師」階層の發生について』《「史海」》《東京学芸大学史学会刊》第一号所収）は、本研究論文の一部を成す

(2) 本居内遠「賤者考」（「本居内遠全集」第十二、一九五頁）

(3) 「史籍雜纂」（国書刊行会版）第三、三三四頁

(4) 乞胸（乞丐）については、後出Ⅱ、1、註（1）参照。

(5) 三浦周行博士「法制史之研究」二六九頁

(6) 博奕に使われた俳諧の一種で、発句の第一句を三様に出し、人をして各々第二、第三句を附けさせて勝負を争うもの。宝永・正徳頃に冠附より転化して行われた。（荻生徂徠著北島正元校訂「校註政談」《雄山閣文庫》一六頁、註（8））

(7) 「御定書百箇条」（「徳川禁令考後纂」《「司法省版」》。「日本古代法典」。隈崎渡教授「日本法制史概論」附録《「古法令類集」》収）のうち、

（四八）密通御仕置之事

（寛保二年極）

一 姉妹伯母姪と密通いたし候もの

（五十）男女申合相果候者之事

（享保七年極）

一 双方存命に候はゞ

（同）

男女共違国 非人手下

三日晒 非人手下

一 主人と下女と相対死致仕損主人存命に候は、

非人手下

(五十五) 三笠附博奕打取退無尽御仕置之事

(享保十一年極)

一 三笠附旬拾

家財取上 非人手下

(同元年極)

一 取退無尽札壳

(七十一) 人殺并疵附御仕置之事

(従前々之例)

一 離別之妻に。疵附候もの

入墨之上 遠国非人手下

(七十九) 拾五歳以下之者御仕置之事

(寛保二年極)

一 拾五歳以下之無宿者は。途中其外にて。小盗いたし候におゐては

非人手下

(8) 「法曹後鑑」。石井良助博士「日本法制史概説」五〇〇—二頁。滝川政次郎「日本社会史」(乾元社版)三四五—六頁。

三浦周行博士「穢多非人の法制上の地位」(「法制史之研究」一一三二頁以下)

(9) 内務省警保局「警察研究資料」第六輯、七五一頁

(10) 筆者所蔵の享保十年九月「弾左衛門由緒書」。本稿1、1参照。幸田成友博士「弾左衛門の生計」(「日本経済史研究」

五九九頁) 磯ヶ谷紫江編「江戸浅草弾左衛門由緒、全」

II 賤民支配体制確立の陣痛

1 穢多頭支配から浄瑠璃太夫・役者等の離脱

江戸時代における賤民支配の一考察

(一) 芝居の役者は、穢多頭彈左衛門の支配を受けるかどうかにつき、からくり師小林新助對彈左衛門の訴訟が行われた結果、小林側が勝ち、ここに独りカラクリ師に限らず、広く淨瑠璃語り、役者等までも、穢多頭の支配を受けないことになつた(1)。

この事件は、宝永五年(一七〇七)に對決されたが、それまでは、役者はどう社会的に考えられたか。

「乞胸(2)香具河原者掟之事」(3)のうちに、

芝居と申すは、田舎在々には無^レ之、江戸浅草猿若町中村勘三郎座、市村羽左衛門座、河原崎權之助座の外無^二御座^一、此外御府内は勿論、田舎在々に罷出、渡世致し候等御法度に候、此者、身分の義は外に無^レ之、河原者と唱ひ、往古京都五条之河原芝の上にて、手踊致し百文貳百文之手内を営み居候、芝居に入ると申し唱へ候(中略)尤も此者は、素人に紛ると云ふを以て、御府内は勿論、何方へ罷出候とも、編笠を被り、通行可^レ致と被^二仰付^一、其外、猿若町之芝居外、何方なりへ、罷出渡世する義、御制禁に被^レ遊有^レ之、猶天保度、水野越前守様御老中御勤役の節、別に嚴重に被^二仰付^一、何方へなりとも罷出渡世致候義、不^二相成^一候事とある。その身分的制約の一端が、この掟を通してうかがえる。

ここに注目すべきは、「乞胸香具河原者掟之事」のうちに「此者、身分の義は……河原者と唱ひ」とあることで、この河原者ということについて「嬉遊笑覽」(4)に、

歌舞伎のものどもをかはらものといふハ賤めたる詞なり河原にて始めたる業なればそのものと伍をひとしくいへり
とある。

また女歌舞伎が盛んとなつたが、その弊害対策に江戸幕府は風俗取締を実施し、その取締が、役者の迷惑となつ

た。さらに、

爰に京都の役者村山又兵衛という者あり此者承応二巳年其比御奉行祇園御参詣のきざみ御駕訴訟申上芝居御赦免の段ひたすら御願申上しかど御取上げなかりし云々

それでも、さらにめげず、心をを上げまし、又兵衛は、願ひ続けているうち、ついに同年三月に、物真似狂言づくしと名目を改めて赦免を受けた。

此又兵衛が事を聞伝へ惣じて役者たる者は川原者と惣名を附又は穢れし身なりなどいやしむるは大に相違なる事なりと歌舞妓事始にも書記せりとある。

享保十年（一七二五）、「彈左衛門書上」⁽⁵⁾の末尾に、

一 ササラ

一 茶せん

右者關八州村々ニ有之候得共、当時ハ無之とあり、また、「一話一言」⁽⁶⁾に、

箆之儀に付申上候書付 御代官 小野田三郎右衛門

一 箆之儀承合候処 箆と申すは芝居等仕候者に候処 駿府町奉行にて囚人等取扱せ候由之者にて非人杯と申ものにも無之先河原ものと申やう成者に有之同所町御免之あやつり等致候云々

とあり、そうして「駿国雑志」⁽⁷⁾に、

説教師、一名箴の者

ともある。この説教師とは、芸能者に属する人々である。

(二) 芝居役者が、彈左門支配から脱離を公的に確認されるに至つた経過につき「勝扇子」(8)に、

歌舞妓狂言座之輩、機多の手下并に非人の類に無之証書、宝永五年之公事荒増を記し、二代目市川団十郎これを勝

扇と号し家蔵す、斯る証跡を以て四代目の市川団十郎、即三代目海老蔵也、安永二年巳の春中村座和田酒宴栄花鑑

之砌、芝居百五拾年寿口上之節、伝来之品々披露之上にて、如レ此無レ上御方様へ被レ為レ召し者、各々様方河原者

七乞食など、御心得違レ無之様と申せしも、一つは此書によつて也、今是を借受、爰にうつしぬ、既に原本は五代

目市川団十郎、美濃紙江自筆をもつて、

(二七〇八)

宝永五年小林新助江戸公事日記写

京都四条河原からくり師小林新介と申者、江戸へ罷下り、夫より房州江旅芝居に参り、房州の機多狼藉致候ニ付、

江戸表御番所及ニ御沙汰に「機多之頭矢野彈左衛門と対決仕候覺書写

が載せてあるが、その語るところは次の通りである。

この訴訟は、宝永五年三月廿一日、坪内能登守(三月御月番)、丹波遠江守(御立会)、松野老岐守(御立会御病氣故無

の下に裁判が行われ、以下の理由で、彈左衛門支配を受くべき旨、申渡された。遠江守の意見では、旅芝居は、江戸

の堺町、木挽町とは違つて、「彈左衛門下タ乞胸同前」の旨であつた。

これに対して、小林新助は、すでに京都では、御所へ出演をし、四条の歌舞伎、繰座へも出ているから、彈左衛門

の支配を受ける理由がない。堺町や木挽町の芝居は、彈左衛門支配外である。が、独り旅芝居が、その支配に服せよ

とは、失当である。もともと役者は、旅芝居で稽古修業を積み、江戸、京都、大阪三都の晴の檜舞台を勤める。檜舞台の芝居と旅芝居は、本質上異ならないと申開いた。かくして同月二十五日に原・被両人の出廷を求め証拠調べを行うことになった。

当日、弾左衛門は、小塚原で結城武蔵太夫一座の芝居興行の際、一斗樽の酒、鳥目一貫文および木戸札百五十枚の附け届けがあつたこと。さらに千住で、和泉太夫芝居の際も、酒と木戸札が届けられた旨、また浅草奥山で、木曾山金兵衛の芝居興行にも、木戸札百五十枚が届けられたこと等。こうした近頃の例を挙げて旅芝居が自分の支配下にあることの証拠とした。こうした申立を受けたので、奉行所は、以上申立にある諸大夫元をば同月二十七日に召喚した。ところが、和泉太夫は、部下の取計いであつて太夫元自身の関知しないことと主張し、結城武蔵太夫は、弾左衛門の支配を承知の上で贈物をしたのではなく、場内の騷擾を避けるため手代の計いによつたと弁明の申立をし、金兵衛は、奥山の近くに住む穢多が、木戸札をねだるので呉れたまでで、決して弾左衛門に贈つたのではないと申立てた。そうして、その日、小林新助は、貞享元年（一六八四）、京都の儒臣黒川道祐著「雍州府志」の芝居の条に、

有ニ歌舞妓者ニ元出雲大社巫女有下号ニ国女ニ者上一ニ転神楽一而歌舞是古所謂白拍子之類而元神楽之變風也永祿年中
有ニ名護屋三左衛門者ニ元武人而落魄生也在ニ京師一則与ニ国女ニ密通共謀レ之作ニ歌舞妓之曲ニ歌舞妓中古所レ称狂言
様也云々

の文言を利用し、芝居は、以上の記述により、その起源の上限たる永祿年間と宝永年間とは、年を隔てること僅かに百四、五十年に過ぎない。しかも、弾左衛門が頼朝から賜わつたという治承四年（一一八〇）の判物に登載されてある支配下の二十八座のうちには歌舞伎は含まれていないのは、少くとも治承年中に歌舞伎は未だ發生していない証拠

となる。あまつさえ、浄瑠璃、人形芝居も受領している例をもつて穢多の支配を受けないと主張したため、ついに原告たる小林新助の勝訴となった。かくして役者、浄瑠璃太夫、からくり人形芝居太夫は、穢多支配を脱出した。しかし地方によつては、なお、關係をもち続けているところも例外的にはあつた。

(1) 三好伊平次氏「同和問題の歴史的研究」二二〇—二二二頁

(2) (1) 乞胸とは、「山本仁太夫書上」によれば、弾左衛門の配下非人頭車善七の支配下に属し、綾取、猿若、江戸万歳、辻放下、操り、浄瑠璃、説教、物真似、仕形能、物説、講釈、辻勧進等を興行するものをいい、その乞胸頭を山本仁太夫という。明和五子年（一七六八）中より江戸下谷山崎町壱丁目町内に住居していた。（「御府内備考」『大日本地誌大系』第一卷、四四九頁以下）卷之二十三

(3) 幸田成友博士は、「日本経済史研究」において、「江戸時代には其身分の百姓町人と穢多・非人とに跨れるものありたり。例せば乞胸（ゴフムネ）なる者の如き、其の家業は寺社の境内等に於て芸能を演じ観覧料を徴する者にして非人に類似するも、身分は町人なるを以て、家業につきては非人頭たる車善七の支配を受け乍ら、身分につきては町役人に属したりしが如し。といい、また『乞胸』は、「江戸時代は、仁太夫の配下におかれ最も下層の大道芸人であつた。」ともいう。

(3) 諸井六郎「徳川時代之武蔵本庄」一五九頁

(4) 喜多村信節「嬉遊笑覧」卷五下（近藤出版部刊、上卷六二三頁）

(5) 江戸弾左門由緒書附録

(6) 太田南畝「一話一言」卷十九（『日本隨筆大成』別卷上、七八七頁）、堀一郎博士「我が国民間信仰史の研究」三八八頁

(7) 「駿国雜志」卷九ノ下

(8) 三田村鳶魚氏校訂「未刊隨筆百種」（米山堂發行）第三、四二五—四五〇頁

(9) 京都叢書「雍州府志」古蹟門上、二四二—四頁

2 穢多対座頭(当道)の訴訟と座頭の離脱

頼朝より戴いた判物に記載の二十八座(廿九座)のうち第二番に座頭が入っている。この座に属する職業も、時代が経つとともに賤民社会から離脱していったのがあることは、すでに述べた役者等の例で判ろう。ところが、元来、身分は賤しくなく、業だけが「下り職」といわれるものがある。従つて、その職を廢すれば、直ぐ常民に復することができるという思想があることを、柳田国男氏は、直接、江戸時代の最後の座頭として残っている者から聞いたと報告しておられる(1)。そうして、さらに、

坐頭ノ所謂下リ職ハ些シク禪家ノ所録ト異ナルモ、要スルニ卑職ノ家ヨリ弟子ヲ取ルベカラズ、其住セシ屋敷ヲ買ヒテ住ムベカラズト云フナリ。然ルニ此坐頭ナル一階級ハ江戸時代ニ至リ大ニ地位ヲ改良シタル一箇ノ所謂職人ナリ。此徒ハ好機会ヲ把ヘテ其配当ヲ受クル權利ヲ職務ト分離セシメ、一躍シテ「ホイト」ノ域ヲ蟬脱セシモノナリ。曾テ阿波侯ノ能役者ノ家ニ配当ヲ取リニ行カザリシ爲紛紜ヲ引起セシコトアリ。同類間相互ニ配当ヲ乞ハザル旧習ヲ利用シテ大ニ其地位ノ高キコトヲ立証セシハ、盲人ノ仲間ニハ代々智慧者ノ絶エザリシコトヲ知ルベシ。然レドモ坐頭ノ中ニモ一種盲僧ト称スル在野ノ琵琶法師アリテ、此輩ノ以前ノ生活状態ヲ示セリ(2)。

ここに、ホイトとは、今では衣食に窮した食しい人々が、オコモというように薦をまとい、あるいはカタイというように路の傍などにいて、モノモラヒというように米銭を乞う者をさしているが、以上の名称が和語であるのに対して乞食(こじき)またはコツジキというのは漢音で渡来語である。また「ホイト」ともいう。

(二) 宝永年間に、座頭と穢多との出入があつた。この事件は「諸国座頭官職之事」その他の書物では、宝永説に属して述べられている。所が、中山太郎氏所蔵写本では、元禄説をとっている。すなわち、(元禄二年(一六八九)と明

記している。しかし「三代関」によると、座頭（当道）の代表として公事に当つた檢校岩船城杲（妙門派）は、寛永十四年（一六三七）丁丑五月授、貞享四年（一六八七）丁卯七月十八日寂とあり、元禄二年（一六八九）よりは四年前に死去している。これからして穢多対当道の公事の一件は、当道派の策略が加わつていたのであつて、或は宝永五年（一七〇八）中に、これも有名な穢多対役者の公事があつたのに思いつき事實を捏造して穢多の支配から免れたと故意に宣伝したが、若干の事實を捉え、これを誇張したのではなからうか（3）。

元禄二年長吏彈左衛門と座頭出入ニ付、京都座頭之内五老檢校江戸江罷出公事沙汰甚舖、彈左衛門代々所持候欽明天皇之御朱印、武家頼朝公之御判証文二ツを以、御公儀江差上^{不詳}ニ申分候得者、五老檢校夜逃ス、依之不得止事岩船檢校罷出、又々彈左衛門ト諍論ニ及、則彼右大将頼朝公之御時、鎌倉より給候御定法之御朱印一卷差出、

覺

山守、関守、座頭、髮結、牢番、猿引、渡守、筆師、陰陽師、土器師、墨師、傾城、金堀、傀儡師、簀作、右之外数多有之与雖、是等ハ皆長吏之下たるべし^略。○中其後公儀へ相願候趣ハ、座頭共近来私支配相除度旨申募候得ども、前文之通先祖より之古例御座候間、昔之通り私手下ニ被仰付被下段訴之、又候右大将頼朝公より先祖彈左衛門へ被仰付候支配拾七品之証文指出相願候^略。○中依之岩船檢校被召出、彈左衛門申口之通りヲ以御尋有之、岩船御答申上候には、如^レ仰彼者先祖ハ頼朝公御代者三千町之領主ニ而、御旗本之列に相加り候事故、彼が手下に罷成候得とも當時者エタ而已之渡世仕候ニ付而ハ、手下に可被成筋無之旨申上、彈左衛門申上候ハ、然れ共三味線之曲を表ニ仕候座頭之義、三味線ハ皮を張候者ニ而候得者、當時迎茂手下之筋ニて候よし申上る、檢校申上候者、座頭表と仕候音曲者琵琶法師と申習ハし、琵琶を表ニもて遊び申候処、太閤秀吉公之御時西山檢校と申者、琉球国之樂器の内三

線トとなへ候もの渡候時、久我大納言様御慰に手を付候て用ひ初候、決而三味線ハ表に不仕候、且琵琶を用ひ来り候事ハ、人皇五十八代光孝天皇の御子雨夜親王御盲目にならせられ、御生涯の御慰に御琵琶を御弄なされ、彼王子琵琶の曲を御伝ひなされ、其上国々の盲人ども御不便ニ思召、後世盲人の世渡りの為、琵琶を表の業といたすべきと也、是より琵琶法師と申伝へ候、雨夜親王御末孫たる故を以、久我様にて官位等茂仕来り候、全三味線は慰ニて職之表とハ不仕、琵琶を表と仕候義ニ候と申上候得バ、彈左衛門申上候ハ當時之儀者不用、元來之儀を於相用候者、手下ニ仕候て不苦筋と奉存候ト申立けるゆへ、岩船も無申訳既了負哉と見る所に、又岩船申上候ハ、彈左衛門申上候頼朝公より被下置候拾七ヶ条の御朱印之内に、山守・関守・座頭と有候ニ付而者、時代之移替ニ而當時者山守被成候方、叡山日光山之御門主も山守たるべし、関守とても昔とは品替り、所々の関守之内ニ而、就中箱根関守等も、往古の通り彈左衛門手下に有之候ハバ、座頭之儀も聊申分無之、彼が支配請可申旨申上げる故、彈左衛門一言之申上義無之、依之右拾七品之内山守・関守・座頭之三ヶ条、永く手下御除被下候事ニ相成、右評論ハ元禄二己二月より、同年九月十九日迄之事也

雨夜親王系圖書、欽明帝の御朱印も偽造であつた。しかし幕府は、これが真偽は、座頭取締上、不問にしていた。

かくして、当時盲人は、一応政策上、座頭座で統轄させていたのである(5)(6)。

(1)(2) 柳田国男氏「所謂特殊部落ノ種類」(「国家学会雜誌」第二七卷第五号、一一六―七頁)

(3) 柳田国男氏監修、民俗学研究所編「民俗学辞典」二〇四頁

(4)(5) 中山太郎氏「日本盲人史」三八六―三九二頁、三九七頁、註(三)

(6) 菊池山鼓氏「長吏と特殊部落」下巻四三―四四頁

むすび

江戸時代において穢多頭彈左衛門は、頼朝公判物、由緒書等を訴訟その他、事ある毎に、幕府に差出していた。幕府当局は、賤民支配政策上、法的に彈左衛門による支配体制を承認した。しかし、この体制確立の陣痛期には、賤民社会を構成する各職種の間に関係の変化が爆発し、役者・座頭等が、身分に関する自主的な法廷斗争による解放運動の結果、見事にその効を奏し、賤民支配権の埒外へ離脱していった。

ここに注意したいのは、為政者は、古文書の価値判断に盲目であつたのでは、決してなかつたのである。むしろ封建的身分制の強化策として、偽書であつても一応彈左衛門の賤民支配の実力を高く評価した上で、それら穢多文書を政治的に利用し、そこにまた法的効力を附与したものと問題を正しく理解せねばならないことを強調しておきたい。

（追記）本論文は、東京大学教授石井良助博士、中央大学教授隈崎渡岡先生の御高教を恭ういたしまして、昭和三十一年十月二十日法制史学会東京部会で、研究発表を行いましたときの草稿であります。